

Title	研究に関わる相談サービス(文献研究の範囲決定、スケール探し、投稿誌選択)：大阪大学生命科学図書館相談サービス事例(その1)
Author(s)	諏訪, 敏幸
Citation	医学図書館. 55(3) P.246-P.250
Issue Date	2008-09-20
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/2943
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

研究に関わる相談サービス（文献研究の範囲決定，スケール探し，投稿誌選択）： 大阪大学生命科学図書館相談サービス事例（その1）

諏訪 敏幸*

大阪大学附属図書館生命科学分館

I. はじめに

今号と次号の2回にわたり，大阪大学附属図書館生命科学分館（略称，大阪大学生命科学図書館；以下，当館）における相談サービスについて報告する。今号では研究活動に関わる相談サービスから3例，主に書誌データベースを活用した調査技術の側面を中心に紹介する。次号ではデータベース検索に関する相談を素材に，相談者との対話などカウンター・ワークを中心とした報告を予定している。いずれも当館参考カウンターで看護系分野を中心に繰り返し相談が寄せられる問題を取り上げる。今号は特定の個別事例の紹介というより，やや一般化し，解説風に叙述した。実際の事例における具体的な対応は相談者のニーズやその時々 conditions に応じて多少変わる。

II. 文献研究における年代範囲の決定

1. 問題と背景

卒業論文に文献研究を選択する看護系学部生が毎年何人か相談に訪れる。研究活動の一環として総説の執筆，システマティック・レビューや臨床ガイドライン（以下，SR/GL）作成を手掛ける研究者もいる。投稿予定論文の文献レビュー部分（以下，LR）について意見を求められることもある。これらの相談は大別して3種類ある。

- ・取り上げるべき文献の範囲についての相談
- ・検索結果の網羅性，および重要論文の見落としがないかどうかの確認に関わる相談
- ・文献群の内容的な解釈・整理方法の相談

ここでは範囲についての相談の中で主に文献研究と総説に関わって頻繁に現れる質問，「何年くらい遡ってレビューをするべきか」についての対応を紹介する。

そもそも総説執筆や文献研究の方法についての情報は乏しい。レビュー対象に触れた解説の多くはSR/GL¹⁾

またはLR²⁾のためのものである。SR/GLでは検証の対象とエビデンス・レベル，LRでは論文本体との関係での重要性が文献選択の主な基準となる。予め対象年代を区切ることはしない。最新動向の解説³⁾は「最近」に視野を限定するが，その実質は新規性，もしくは最新の根拠に照らしての正しさという点にある。これらと異なり，総説や学生の文献研究では「現在から遡って一定期間内の研究動向を追跡する」という立場もあり得る。しかしその「一定期間」をどう決めるべきかについて，具体的に説得力ある指針を目にすることはほとんどない。

2. 対応と手法

まず相談者に研究の構想を聞き，文献的に検証したい問題，研究の位置付けや性格などの情報を収集する。

次に，合理的な年代区切りについて幾つかの考え方を列挙し説明する。基本的には以下の3パターンである。

- a) 同じテーマの直近の総説以後の文献を対象とする
- b) その問題について何かエポックメイキングな出来事があった時以降の文献を対象とする
- c) 追跡・調査可能なすべての文献を対象とする

以上のうち，a)は，同じテーマの総説が既にあれば，そこまで現れた文献はその総説で既に総括されているのだから，それ以降をまとめれば良いという考え方である。b)は，その問題を取り巻く事情が大きく変わる前と後とでは問題自体が変わって来るであろうという考え方である。例えば介護者の負担についての総説で介護保険制度以降のみを扱うとか，ある疾患の治療後のリハビリテーションについての文献研究で学会のガイドラインにより治療法が大きく変わって以降に限るといった場合である。以上の2つに対し，c)はSR/GLと同じように可能なすべてを対象にするという考え方である。どれが適当かは冒頭に尋ねた研究構想や研究の性格に依存する。

相談者側からは「最近10年」等の年数・年代や適当な件数などの区切りが提案されることもあるが，いずれもそれだけでは合理性に乏しく勧められない。

*Toshiyuki SWA : 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-3.
mktb@library.osaka-u.ac.jp (2008年5月23日 受理)

いずれの考え方によるにせよ、基礎的な作業として文献の年代的分布状況の確認が必要である。また上述のような合理的な方針が決められない場合は、分布状況を見て判断することもある。このため、以上の説明に続き、筆者が「年代輪切り法」と呼ぶ手法（以下の手順）で年代別の量的・質的な分布状況の特徴を実地に観察する。これは医学中央雑誌・MEDLINE・CINAHLなど主題検索に対応したデータベースならどれでも可能である。

1. 主題的な検索により、レビュー対象となる主題内容を持つ文献集合を作る
2. 1. でできた文献集合に対し、掲載誌出版年での絞りを使得って年代別集合を作る
3. 各年代別集合の文献件数と内容を観察する

通常はその場で相談者と共に観察するが、卒業研究の場合などは方法だけ示して本人に任せることもある。

上記1の検索は、時に判断が難しい。通常のレビューのための検索は再現率重視で適合率は多少犠牲にできるが、年代輪切り法では再現率だけでなく適合率も良くなければ意味のある情報が得られない。ただし多くのレビューはある程度幅のある主題を扱うので、通常は主題検索で何とかできる。キーワード検索は危険であり、特殊な場合（「用語を追う」レビュー、当該シソーラス用語が未採用の年代までを含む場合など）を除き極力避ける。

3についても注意が2点ある。第1に、量的な（ヒット数の）経年変化を見るときは、その分野の採録誌数の経年変化にも注意し、必要なら補正する。第2に、質的な（文献の内容の）経年変化は文献の主題（タイトル）だけでなく文献種別にも注意する。例えば解説が多数を占めるのは、海外からの輸入期や問題提起期など初期の時代か、逆に学問的・実践的に十分成熟してから後であることが多い。また会議録はクリニカルな、原著論文はアカデミックな場での関心を反映する傾向がある。

なお複数の主題やデータベースで年代輪切り法を組み合わせると、海外から日本への流入の動きや、ある分野から他分野への影響などを観察できることがある。

Ⅲ. スケール探しとスケール評価

1. 問題と背景

計画中の看護研究にどんなスケールを使うべきか、そもそもどんなスケールがあるのか、適否・優劣はどう調べたらよいかといった相談が、当館では院生・学部生・教員・看護師らから、年間20～30件程度ある。

生理学・診断学的な指標による研究を除けば、心理学や看護学における量的研究は、質問紙やスケールなどの

測定用具を必要とする。中でも信頼性・妥当性が検証されたスケール⁴⁾は質的に高い研究に不可欠である。しかしどんな問題に対してもその問題に適したスケールが常に用意されているわけではない。研究目的に合った良質で利用可能なスケールを見つけ出すのは意外に難しい。大学院レベルの研究が近年急速に拡大した日本の看護学領域はこの問題がとりわけ深刻である。

適当なスケールが見付からない場合、量的研究を維持するためには次のような選択肢が考えられる。

- a) 信頼性・妥当性の検証されたスケールを自製する
- b) 内容的に近いスケールを改変して使用する
- c) 海外の適当なスケールを翻訳して使用する
- d) 信頼性・妥当性の検証抜きで質問紙を作成する
- e) 既存のスケールに合わせて研究課題を変える

以上のうち a)～c) は適切に行われるならば信頼性・妥当性は担保できる。そもそも出来合いのスケールの妥当性には限界があり、スケールは研究課題に合わせて自分で作るべきなのだという意見も一方にある⁵⁾。だがそれに要する知識・手間・時間が膨大であることも考えねばならない⁶⁾。改変・翻訳を安易に考える向きもあるが、これは誤りである。改変・翻訳の作業は、慎重な計画と体制作り、著作権処理および異版管理のための原作者との連絡調整⁷⁾、改変・言語的翻訳・文化的移植を経た後での信頼性・妥当性の再検証などを必要とし、全体として優に一つの研究と言うべき質的・量的な仕事になる。他方 d) e) はこれらの困難を回避できるが、解釈の恣意性、信頼性・妥当性の低下、主題や枠組の制約、それによる独創性喪失・画一化など、研究の質の問題が発生する。

いずれの方針をとるにせよ、どんなスケールが（日本語であれば良いが、他の言語でも）存在するのか、またそれぞれがどんな特徴を持ち、どう評価できるのかについて十分な情報がなければ話にならない。このため、目的に合ったスケールをリストアップし、それらを比較・評価することが必要となる。

2. 対応と手法

そのための方法は大きく2つある。

1つは、スケール情報を集めた図書、ウェブサイト、データベースなどを利用するという方法である。だが図書は評価情報は豊富だが網羅的でない。スケールのデータベースは、網羅的だが実地の評価情報に欠ける。

もう1つは書誌データベースを用いて実際の論文での使用状況を調べるという方法である。以下ではこの

方法を紹介します。書誌データベースは主に CINAHL か PsycINFO を使う。医学中央雑誌および MEDLINE はこれについてはあまり役に立たない。研究課題を主題的に包含する文献集合を作った上でシソーラス用語「アンケート」などで質問紙調査を抽出し、めぼしい文献を1つ1つ読んでチェックするのが精々である。これに対し CINAHL および PsycINFO には測定用具を索引化した項目 (CINAHL の instrumentation, および PsycINFO の tests and measures, 以下 IN/TM) があり, これを活用して効率的な調査ができる。手法は2種類ある。

1つめの手法は, 測定対象となる問題を扱う文献の集合を主題検索的に作成し, それらのレコードの IN/TM を見ることである。3つ注意事項がある。第1にシソーラス用語の適用年代に注意しつつ, 可能な限り主題検索のみを用いる。第2に適合率より再現率を重視する。第3に CINAHL はエッセイや解説が多いので Research Article だけに絞る。ここからスケール情報を抜き出すと, その問題を計測し得るどんなスケールがあるか, 各スケールの使用頻度と使われ方の違い, スケールの組み合わせ, 最近良く使われているスケール, などが観察できる。さらに主題の掛け合わせで絞り込み, 使用スケールの違いを観察すれば, より詳細な分析が可能である。

2つめは以上と逆に, IN/TM を対象項目としてスケール名で検索し, そのスケールがどんな研究に使われているかを見るという方法である。第1の手法があるテーマについて使用されるスケールを網羅的にリストアップした上でそれらの比較・評価をおこなうのに対し, この手法は特定のスケールの評価を目的とする。信頼性・妥当性検証論文を確認したり, 後で結果を比較対照するために同じスケールを使った既存研究を洗い出すこともできる。複数のスケールについて個別に検索を繰り返し, 傾向を比較するのも有用である。ただし IN/TM は転記項目なので, 名称表記のバリエーションに注意する。

類似手法として Web of Science を使用する方法もある。あるスケールを使用する際に典拠として引用される文献が存在する場合, その文献の著者と年から Cited Ref Search → Finish Search で検索する。なお引用文献フィールドは CINAHL や PsycINFO にもあるが, Web of Science に比べて漏れが多く有用性に乏しい。

IV. 論文投稿誌の選択

1. 問題と背景

海外の論文誌に論文を投稿したいがどの雑誌が良いかという相談が年に10件前後ある。多くは「大切な論文を

投稿するのに海外誌の状況がよくわからない」という不安, そして「図書館ならば雑誌についてはよく知っているだろう」という期待があつての相談である。

2. 一般的基準の提示

最初に, 論文の主題, タイトル, 内容的な特徴, 目的・性格 (修士論文のまとめなおし, 博士論文の主論文, 副論文, いずれとも無関係な個人論文, 集団のプロジェクト, 臨床報告…)などを説明してもらおう。おおよそは相談者が自分から語ってくれるはずである。必要なら幾つか補足的に質問したり, 論文原稿を (もしも持ってきており, 差し支えなければ) 見せてもらうのもよい。またこの論文の投稿先としてどんな雑誌を今の時点で考えているか, 2, 3挙げてもらってもよい。これによって相談者自身がこの論文がどんな主題分野に属すると考えているかなど幾つかの情報が手に入る。著者本人は自分の論文がどんな主題に関するものか当然熟知しているが, 投稿誌の選択との関係ではやや狭く捉える傾向がある。こちらはもう少し広くかつ分析的に主題や文献の特徴を捉え, 頭の中で整理する。分析的とは例えば, 自分がその論文を書誌データベースに登録するとしたらどのようなシソーラス用語を付与するか, という見方である。

次に図書館員から相談者に, 一般論としての投稿誌選択の考え方を簡略に説明する。Oermann は投稿誌選択において考慮すべき問題として, 主題的な適合性, 文献種別の適合性, 読者の適合性, 雑誌の質と地位, 発行部数, 刊行頻度の6項目を挙げている⁸⁾。しかし日本人の相談者にとって, 問題の軽重, 情報の遠近感, 関心の所在などは自ずから異なる。そこで, 相談の場では広い意味での主題的な適合性を前提に, 問題を考える視点をまず次の2つに整理して図書館員から相談者に提示する。

1つめは, この論文を誰に読んで欲しいか, どの雑誌であればこの論文が重要な読者から評価を得られるかという, 読者獲得の視点である。そもそも何のために論文を発表するか, 何が研究者としてプラスになるかということを考えるならば, 雑誌選択の核心はここにある。類似の問題に関心を持つ研究者たちの目に触れる雑誌, 専門家の適切な反応が得られる雑誌が望ましい。

2つめは業績評価の視点である。業績評価情報は, 多くの場合, 非専門家を含む第三者に提供される情報である。そのため, 本来の論文評価に代わって掲載誌の評価が, また質的評価に代わって数値的・外形的評価指標が影響力を持つことが, しばしばある。

以上の2つは程度の差はあれどんな場合にも考慮しな

なければならない。だが，論文の目的・性格によりバランスは異なってくる。例えば学位請求や就職に絡む論文なら，何はともあれ業績評価の面を軽視できない。他方，自分の生涯のテーマに関わるような論文なら，その論文にふさわしい読者の獲得こそが重要である。結果的にはそれが被引用回数などの評価にもつながるはずである。

3. データ調査

以上の考え方を示した上で，実際にデータに当たる。

まずは読者獲得という観点からのデータ調査である。簡便で効果的なのは主題検索を使う方法である。CINAHL や MEDLINE を使い，この論文をヒットさせるような主題検索を行う。もちろんこの論文はまだ投稿さえされていないのでヒットするはずもない。だが，類似の論文が当たるはずである。画面表示項目を論題(TI)と誌名・年・巻号(SO)だけに絞り，どんな論文がどんな雑誌にいつ掲載されたか，各誌の傾向を確認しつつ細かく見ていく。必要ならオンラインジャーナルで論文の内容や水準を個別に確認する。これらの観察結果から，相談者と図書館員とがそれぞれの知識を背景に，この雑誌は解説中心で現職者指向，この雑誌ではページ数の多い質的研究は苦しい，などとコメントを出し合って雑誌を分析する。類似論文が多数掲載されている雑誌が良さそうに一見思えるが，投稿論文がその中に埋もれてしまわないかどうかを考えねばならない。とはいえ十分に印象的で説得力ある論文なら類似論文の中で競争するのの一つの選択だろう。逆に他分野の読者を得たい場合もある。重要なのは雑誌自体ではなくこの論文と読者との関係であり，この作業は望ましい読者の獲得のためのマーケット・リサーチであることを忘れてはならない。

これに匹敵する有力な手法は，時間がかかるが，Web of Science を使う方法である。主題検索で探し出した論文や既知の有力論文がどんな論文に引用されているかを見る。これにより，自分の論文が誰にどう読まれると期待し得るかの事前評価が可能になる。

もう1つ，NACSIS Webcat を用いて所蔵館数を調べるという簡便な補助的手法がある。言うまでもなく，所蔵館数が多いほど国内の読者も幅広く，同分野の研究者からも認知されやすいという仮定での評価である。

次に業績評価の視点からの調査である。言うまでもなく JCR でインパクト・ファクター（以下，IF）その他の指標を用いるのが常用の手法である。IF は，注意深く使用するならば，その分野における雑誌の力量を表す最適の指標である。看護系分野で IF を使用する場合は，

さらに幾つかの背景事情も考慮しなければ，意味のある評価にならない。例えば医学と看護学の隣接領域の雑誌は，これらの分野の引用カルチュアや研究者人口の違いから，医学文献の比重が高い雑誌ほど IF が高くなる傾向があると考えられる。また純粋に看護系の雑誌の IF 順位は，学会規模，購読者数などの主に人口的要因や周辺誌の状況に左右される度合いが高いと考えられる。等々。

以上の作業でリストアップされた候補誌について，最後に足切り要因をチェックする。最も重要な足切り要因は投稿資格，次いで（多くの人が気にする）アクセプト水準である。事情によっては受理・掲載までの所要時間が問題になることもある。

投稿資格は投稿規程や学会サイトでほぼ確認できる。

アクセプト水準は IF や掲載論文の水準からある程度推測できる。しかし実のところ一元的な「水準」という捉え方よりも，編集方針や査読の傾向とその論文が合うかどうかの方が重要ではないかと筆者は考えており，そのような観点からも検討するよう相談者には勧めている。もし時間的・精神的に余裕があれば，敢えて1ランクていど査読の厳しそうな雑誌に出してみることを考えても良い。その問題の専門家をはじめレベルの高い複数の研究者から査読意見の形でコメントを貰えるめったにない機会である。貴重な経験になるかもしれない。

受理までの日数は，誌面に記載されている受付日と受理日を見る。掲載日（刊行日）は所蔵館受入日などから逆算して推定する。雑誌が絞られていればさらに Epub 公開日，引用文献など記事中に現れる情報，周辺情報などからこれらの時期を推定する方法を示すこともある。

最後に複数の候補誌を挙げ，ここまでのコメントをまとめる。慎重を期すなら再度 CINAHL か MEDLINE を ISSN と出版年（PubMed なら Single Citation Matcher から誌名と年）で検索し，候補雑誌の最近の掲載論文をリストアップする。このリストと先ほどの主題検索のリストを以下の作業のため持ち帰ってもらう。

- ・最近の掲載論文の傾向や編集姿勢をチェックする
- ・めぼしい論文を各誌何編か読み，水準を確認する

参考文献

- 1) 一例として: Hek G, Langton H, Blunden G. Systematically searching and reviewing literature. *Nurse Res.* 2000;7(3): 40-57.
- 2) 一例として: Carnwell R, Daly W. Strategies for the construction of a critical review of the literature. *Nurse Educ Pract.* 2001;1:57-63.

- 3) 一例として: Siwek J, Gourlay ML, Slawson DC, Shaughnessy AF. How to write an evidence-based clinical review article. *Am Fam Physician*. 2002;65:251-8.
- 4) McDowell I. The theoretical and technical foundations of health measurement. In: *Measuring health: a guide to rating scales and questionnaires*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press; 2006.p.10-54.
- 5) DeVellis RF. *Scale development: theory and applications*. 2nd ed. Thousand Oaks: Sage; 2003.p.1-2.
- 6) Netemeyer RG, Bearden WO, Sharma S. *Scaling procedures: issues and applications*. Thousand Oaks: Sage; 2003.p.8-9.
- 7) 木島伸彦. 人のものを借りるには?. In: 安藤寿康, 安藤典明編. *心理学者のための研究倫理: 事例に学ぶ*. 京都:ナカニシヤ出版;2005.p.160-70.
- 8) Oermann MH. Selecting a journal. In *Writing for publication in nursing*. Philadelphia: Lippincott; 2002. p.15-27.

Consulting Service on Review Coverage, Finding and Evaluating Scales, and Journal Selection for Publication of an Article: a Report from the Osaka University Life Sciences Library, Part 1

Toshiyuki SWA

Osaka University Life Sciences Library. 2-3 Yamada-Oka, Suita, Osaka 565-0871, JAPAN

Abstract: Application of bibliographic databases enhances the reference service in a medical library. In this report, three subjects about which clients often consult the librarian in the Osaka University Life Sciences Library are presented: 1) determining the depth of years to be covered while writing a review, 2) finding and evaluating suitable scales for ongoing studies, especially in the field of nursing sciences, and 3)

choosing the best journal to submit an article. For each issue, a solution process is illustrated and its effectiveness is shown.

Key words: Consulting Service; Academic Review; Scales; Manuscript Submission; Bibliographic Database Searching (*Igaku Toshokan* 2008;55(3):246-250)